

旧約聖書における単発的メタファ表現と概念メタファ

—表現の隙間を埋めるものは何か—

橋本 功・*八木橋 宏勇

キーワード：旧約聖書、単発的メタファ表現、概念メタファ、解釈の安定性

1. はじめに

「自然」と「文化」は対立する概念としてしばしば用いられてきた(池上 2002: 11, Eagleton 2000: chap 4)。ラテン語の「耕作」を意味する語に由来する *culture* は、自然の中へ人間が入り込んで耕作し、それに手を加えて人間的な秩序に組み入れた部分のことを意味していたという(池上 2002: 11)。人間の手が及ばない領域である「自然」(*nature*) に対して、我々が身を置く領域を「環境」(*environment*) とし、両者を区別する場合がある。そうであるならば、「人為的である」という点で文化と環境は近接関係にあると考えて問題はなさそうである。文化的に構築された産物である個別言語を見るならば、両者の関係はより一層明確になってくる。

本稿の目的は、旧約聖書を読み解く概念的な仕組みを論じた橋本・八木橋(2006、2007)において十分に論じることができなかった「単発的メタファ表現」(*one-shot metaphorical expressions*) の存在を指摘し、より包括的な聖書のメタファ分析を提示することである。旧約聖書は数千年前に作られたために、今日とは時代的にも言語的にもそして文化的にも大きな隔りがあるが、現代に生きる我々がそれを理解できるのはなぜだろうか。本稿でもこれまでのスタンスを引き継ぎ、「聖書を読み解く鍵は、概念を構築する〈人間〉にある」という視点からこの問いに挑みたい。

2. 単発的メタファ表現

次の引用は、天地を創造するために神が最初に行った仕事を描写した一説である。

(1) וַיֹּאמֶר אֱלֹהִים יְהִי אוֹר וַיְהִי אוֹר

(Then God said, "Let there be light"; and there was light. *Gen.* 1:3, NKJ)

אוֹר (光) がなぜこの世の誕生を含意するのであろうか。無数にある語の中からいくつかの語を選び出すことによって構築された言語表現が、適切に機能して意味を伝達していることを考えれば、そこには何らかの理由が潜んでいると考えてはいけない理由はないであろう。本稿ではその回答をメタファという認知的な概念操作に委ねたい¹。(1) は次のような経験によって動機付けられたメタファが深く関わっている。

* 杏林大学外国語学部助教

¹ 狭義のメタファは類似性に基づく写像を指すが、広義にはメトニミを包含する比喻表現の総称で用いられる。ここでは後者の意味で用いられている。

人間は母親の胎内、つまり太陽の光が直接届かない闇から抜け出ることによってこの世に誕生し、光を体験する。〈光と闇〉はそれぞれメタファ的思考を介して〈存在と非存在〉を示している。「光が当たる」はその存在を強調し、「闇に葬る」はある存在を非存在にすべく覆い隠す。וְהָאָרֶץ הָיְתָה תוֹהוּ וָבִהוּ וְחָשֶׁךְ עַל־פְּנֵי תְהוֹם (The earth was without form, and void; and darkness was on the face of the deep. Gen. 1:2, NKJ) これは光が誕生する前の闇の状態を描写した箇所である。〈非存在〉が חָשֶׁךְ (暗闇) で表現されている。

橋本・八木橋 (2005: 27)

〈光と闇〉が「存在と非存在」を示すのは現代英語及び現代日本語に於いても観察される (bring something to *light* ⇔ be in the *dark*, 「光を当てる」⇔「闇に葬る」)。時代や文化を超えて観察されるこのメタファを、我々人間が上記引用のような経験を繰り返すことにより心的に構造化している。それゆえに非常に安定した多くの表現が生み出されていると考えられる。

- BIRTH IS ARRIVAL ● DEATH IS NIGHT (DARKNESS)
- LIFE IS LIGHT ● BAD IS BLACK

〈光〉や〈闇〉という概念は比較的多くの表現に採用され、前者は肯定的なそして後者は否定的な雰囲気を漂わせていることは明らかであるが、〈光〉や〈闇〉が内在的にそのような性質を持ち合わせているのではない。我々人間が上記の概念メタファのような解釈の鋳型を活用しながら、主体的にそのような解釈を導き出しているのである。概念体系に根ざしている概念メタファは、具体的な言語表現を生み出すという点で、生産性が高い概念間の対応関係である。

しかし、旧約聖書の中には生産性が高いとは必ずしも言い切れない概念を用いているにもかかわらず、我々は容易に理解することができる表現がいくつも観察される。この問題を論じるために、本節ではまず概念メタファ理論の概略を提示し、次に単発的メタファ表現の存在を指摘することにより、そのメカニズムの一端を明らかにしていきたい。

2.1. 概念メタファ理論

概念メタファ理論の出発点は、経験基盤主義という意味観にある。従来、西洋哲学や言語学では思考の主体である人間の性質や経験からは独立して外在する客観的実在との対応関係で意味を規定してきた。この考え方のもとではメタファは修辞学的な特異な存在と見なされ、言語研究において長い間周辺的な地位へ追いやられてきた。それに対し Lakoff and Johnson (1980 [2003]: 3) は、そのアンチテーゼである経験基盤主義の観点から、メタファは、言語だけではなく思考や行動といった日常生活に広く浸透しており、概念システムそれ自体がメタファ的であると論じ、新たな意味観を提唱したのである。この経験基盤主義は、生物学的に規定された知覚様式やそれに基づく身体感覚、さらに経験の主体である人間が、自然や社

会といった環境との相互的な関わり合いを通して経験したことが概念として構築されていくという事実を重視した立場である(吉村 2002: 61-62)。これにより、ある概念を別の概念と関連付けることにより理解するという認知プロセスが広く認識されることとなった。つまり、メタファは言語の問題から概念の問題へと議論の場を移すこととなったのである。

我々の概念体系に形成された概念間の対応関係の中で、特に具体的な言語表現を生み出す生産性が高いものは概念メタファ (conceptual metaphor) と呼ばれている。以下は Lakoff and Johnson によるメタファおよび起点領域 (source domain) と目標領域 (target domain) の定義である。

In a *metaphor*, there are two domains: the target domain, which is constituted by the immediate subject matter, and the source domain, in which important metaphorical reasoning takes place and that provides the source concepts used in that reasoning...a metaphoric mapping is multiple, that is, two or more elements are mapped to two or more other elements.

Lakoff and Johnson (2003: 265)

Lakoff and Johnson (1980 [2003]: 154-155) 以降、「経験のゲシュタルト」として捉えられていた2つの経験の相関関係は、このように起点領域から目標領域への写像 (mapping) として明示されることによって、メタファと概念の係わり合いがより一層明確に示されることとなったのである。

2.1.1.1. 概念メタファの種類

ここでは高尾 (2003) の分類に基づき概念メタファの種類を見ていくが、本論と直接関係する「命題的構造のメタファ」と「包括的レベルのメタファ」のみをとりあげる。

2.1.1.1.1. 命題的構造のメタファ

この種のメタファは、経験的に蓄積された典型シナリオ (prototype scenario) と呼ばれる複合的な命題的構造全体が起点領域から目標領域へ写像されているために、シナリオが表す事態の展開の順序も目標領域で保持されているのが特徴である。Lakoff and Johnson (1980 [2003]: 4-6) で提示されている概念メタファ ARGUMENT IS WAR²がその一例である。

ARGUMENT IS WAR (議論は戦争である)

第1段階: 戦闘の準備 → 議論の準備

- (i) She came to the meeting *armed* with all the facts and figures.
(彼女はありとあらゆる事実や数値で武装して会議にやってきた)

² 以降、概念メタファは Lakoff and Johnson (1980 [2003]) に倣い大文字標記 (A IS B) で示す。なお、A は目標領域、B は起点領域を表す。

第2段階：戦略 → 論法

- (ii) If you use that *strategy*, he will *wipe you out*.
 (もしそんな作戦を使ったら、彼に一掃されてしまうぞ)

第3段階：防戦 → 弁護

- (iii) The president appeared on TV to *defend* his tax proposals.
 (大統領は自分の税制案を (防衛する→) 弁護するためにテレビに出た)

反撃 → 反論

- (iv) I decided on a swift *counterattack*.
 (すぐに (反撃→) 反論に出ることを決めた)

第4段階：休戦 → 議論の一時中断

- (v) Let's call it a *truce*.
 (いったん休戦としよう)

退却 → 議論するのをやめる

- (vi) We *retreated to remarshal* forces.
 (私たちは (戦隊を組み直す→) 議論を組み立て直すために退却した)

第5段階：勝利 → 相手に自分の主張を認めさせること

- (vii) After a long debate the senator finally *prevailed*.
 (長い論争の末、上院議員がついに勝利した)

敗北 → 相手の主張を認め、自分の意見を棄てること

- (viii) Matthew kept on arguing his point, unwilling to concede *defeat*.
 (マシューは自説を説き続け、敗北を認めようとしなかった)
 (高尾 2003: 199-200 [一部改])

以上の例から明確なように、議論に関する概念領域は戦争に関する概念領域と体系的に対応している。つまり、目標領域である前者は、起点領域である後者を援用することにより極めて具体的に表現され、この2つの領域間での写像は多くの表現を生み出す基盤となっているという点で、概念メタファとして概念構造に構築されていると言うことができよう。

2.1.1.2. 包括的レベルのメタファ

命題的構造のメタファは典型シナリオが関わっていたためにより特定のレベルの概念構造が写像されていたのに対し、より抽象的で具体的な表現を生み出す、より包括的なレベルのメタファがある。例えば Lakoff and Turner (1989: 37) は EVENTS ARE ACTIONS (出来事は行為である) というメタファを採り上げている。

- (2) The boulder *resisted* all of our efforts to move it.
 (その巨石は私たちが動かそうとするのに抵抗した)
- (3) Events *conspired* to delay the game.
 (出来事が (共謀して試合を遅らせた →) 重なって試合が遅れた)

上の例は人間に見立てることにより、ある出来事に対して能動性が与えられており、それによって行為の因果的な連鎖を見出している。つまりある一連の事象（全体）における出来事 A（部分）と後続する出来事 B（部分）との間に「もし A が起こらなければ B も起こらなかつただろう」という推論を持ち込むことによって両者を関係づけているのである（瀬戸 1997: 151）。このような抽象度の高い包括的レベルのメタファであっても、時間的な概念がそこには深く関わっているのであり、結局は命題的構造のメタファと密接に関係した類似的な構造を持っていることがわかるであろう。

2.1.2. 概念メタファの実在性

これまで論じてきた概念メタファが、我々の概念体系に実在している根拠がいくつかある。Lakoff and Johnson (2003: 246-249) は、多義の体系性、推論パターンの一般化、詩的メタファや新奇メタファへの拡張、プライミングなどの心理学研究、ジェスチャー研究、史的意味変化の研究、談話分析、手話分析、言語習得研究の観点から論じているが、他にも Gibbs and O'Brien (1990) は、概念メタファによって動機づけられているイデオロムが喚起するイメージには母語話者の間で高度な一致が見られるということを論じ、それには起点領域の構造が深く関わっていることを実証した。以下では抽象的なもので具体的なものを喩える例を採り上げ、概念メタファの実在性を示したい。

- (4) Streets that follow like a tedious argument (T. S. Eliot)
 (果てしなく続く議論のように果てしなく続く道)

(池上 1975: 245)

池上 (1975: 245) によれば、〈具体〉→〈抽象〉という一般的な有契性の方向づけが上の例のような詩的メタファでは逆転することがあり、それには普通ではない形式を選択したからこそ得られる特別な効果があるという。「道」という具体的なものが「議論」という抽象的なもので喩えられているわけであるが、これは抽象的な「議論」という概念に対してよりはっきりとした心的イメージが形成されていなければ不可能なメタファだと思われる。出発点と到着点がある議論の途中でなかなか「決着」をつけることができずにいる様相が、「道」という概念に写像されている例である。これは「議論」という概念が先に見た ARGUMENT IS WAR という概念メタファによって心的に構造化されているために成立しているメタファであると思われる。つまりこの概念メタファが「議論」という概念に輪郭を与え我々の概念体系の中で確立されているがゆえに、一見したところ〈抽象〉→〈具体〉という通常は見られないメタファも可能となっているのである。

2.2. 単発的メタファ表現

Lakoff and Turner (1989: 91) は、極めて特定化された写像、すなわち一般性を持たないために概念メタファを構成する概念とは異なり、日常の推論の中で使われるようなことがないイメージの写像を「単発的」(one-shot)と表現している。本論文では、一般性が認められる概念メタファを直接的には構築していない概念によって動機づけられている表現を彼らのタームを借用して「単発的メタファ表現」(one-shot metaphorical expressions)と呼ぶことにする。以下では、先に概観した概念メタファ理論を基に単発的メタファ表現を、2つのイディオムに関する事例研究を通して探っていく。単発的メタファ表現の中でも特にイディオムに関するものを以後「単発的イディオム」(one-shot idioms)と称して述べていく。

2.2.1. 「秘密」に関するイディオム

ここでは「秘密」にまつわる日本語と英語のイディオムを考えたい。考察の対象にするのは『秘密を守る』ことを意味する *button one's lips, be as close as an oyster*、「口にチャックする」、「貝になる」と『秘密を言う』ことを意味する *spill the beans, let the cat out of the bag, come out of the closet*、「人の口に戸は立てられぬ」である。これらはすべて、「秘密」という抽象的な概念をより具体的な概念 (button, oyster, beans, cat, closet, 「チャック」、「貝」、「戸」など) を介して表現しているためメタファが関与しているのは明白であるが、どれもメタファの基盤となる概念領域を構成しているわけではない。それは *open one's button, open an oyster, keep the beans, keep the cat out of the bag, keep in the closet*、「チャックを開ける」、「貝を開ける」、「人の口の戸が壊れた」などの表現は実在せず、これらのイディオムで観察される起点領域から目標領域への写像が多様な表現を生み出しているとは言えないからである。つまり 3.1.1.1. で論じた ARGUMENT IS WAR のような生産性が高い概念メタファによって生み出されたイディオムとは性質が異なる単発的イディオムなのである。Taylor (2002: 500) は *spill the beans* を採り上げ、この *beans* は“confidential information”の意味で用いられているメタファであるが、このような解釈が機能するのはこのイディオムだけであり、この1回限りのメタファは概念メタファの典型ではないと主張している。

しかし、単発的イディオムであるからと言って概念メタファと無関係であるかということでもない。例えば「喉まで出かかっている」(*be on the tip of one's tongue*) は、言葉を発しそうになる状態を表しているが、「喉」(*tongue*) はまだ身体という空間内であるために、実際には何も発言されていない。これを含む「秘密」に関するイディオムには次のような空間概念の認知が関わっていると思われる。

(5) STATES ARE LOCATIONS (bounded regions in space)

(状態は場所である)

(6) CHANGES ARE MOVEMENTS (into or out of bounded regions)

(状態の変化は移動である)

(Lakoff 2006 [1993]: 204)

これらは広く一般に観察される概念メタファで、2.1.1.2. で概観した包括的レベルのメタファ

に分類されるものである。先に挙げた「秘密」に関するイディオムは、表現上は異なるものの、いずれもこの概念メタファにより賦活される次のようなイメージが基盤となって生み出されている。

- (7) 秘密がある空間内に保持されていれば守られている
- (8) 秘密がある空間外へ移動すれば公になる

『秘密を守る』ことを意味する *button one's lips, be as close as an oyster*、「口にチャックする」、「貝になる」はそれぞれ *button, oyster*、「チャック」、「貝」が情報の漏洩を塞ぎ止めるイメージを喚起し、逆に『秘密を言う』ことを意味する *spill the beans, let the cat out of the bag, come out of the closet*「人の口に戸は立てられぬ」ではそれぞれ *spill, let out of, come out of*、「戸は立てられぬ」が情報の漏洩をもたらす、すなわち内から外へ移動するイメージを立ち上げる。

「秘密」を意味するイディオムの構成要素は、生産性の高い概念領域を構築しているとは認められない。しかし『秘密を守る』ということは人間という皮膚を境にした内と外を持つ空間内に情報が留まっていること、逆に『秘密を言う』ということはその空間外へ情報が移動すること、という経験的知識と、状態を場所的に捉える概念メタファの相互作用によって動機づけられているのである。そうであるがゆえに、表現は異なるものの英語でも日本語でも概念レベルでは共通したイメージで捉えられているのである。

2.2.2. *break the ice* (口火を切る)

次に命題的構造のメタファが関わる *break the ice*を見ていく。このイディオムは主に初対面の人の集まりで会話に困っている場面で、誰かのユーモラスな発言が打ち解けるきっかけを作るということを意味している。ここで用いられている *ice* も、生産性のある概念領域を形成するほど多彩な表現を生み出す概念ではない。マケーレブ・安田(1983: 612)によれば、このイディオムは砕氷船が厚い氷を破碎して進んでいく場面に由来する。

[砕氷船の典型シナリオ]

- 第1段階：出航
- 第2段階：行く手を阻む氷の出現
- 第3段階：砕氷作業
- 第4段階：砕氷完了
- 第5段階：航行のスムーズな流れを獲得
- 第6段階：寄港／帰港

まず第1段階は「人々が集まること」に、第2段階は「会話の流れを停滞させる重苦しい雰囲気」に、第3段階は「誰かのユーモラスな発言」に、第4段階は「人々が打ち解けた」ということに、第5段階は「会話のスムーズな流れを獲得」したということに、そして第6段階は「会話の終了」に写像されている。このイディオムが直接関係する第2-5段階には前

節で論じた空間概念に関する2つの概念メタファと起点・経路・着点スキーマ (source-path-goal schema) が関与していると思われる。つまり、第1段階は起点、第2-5段階は経路、第6段階は着点という移動現象全体が認知されており、その途中で STATES ARE LOCATIONS は第2段階、CHANGES ARE MOVEMENTS は第3-5段階の写像の基盤となっていると考えられる。

3. 旧約聖書における単発的メタファ表現

前節では、生産性が低い概念が概念メタファと無関係か否かを議論し、必ずしもそうではないということをイディオムを例に論じてきた。本稿の資料である旧約聖書には、時代・文化・宗教的価値観など現代に生きる我々とは大きく異なる側面が多分に含まれている。それにもかかわらず我々がそれを読み解くことが可能であること、つまりその「言わんとしてゐること」すなわち「意味」を捉えることができるのはなぜだろうか。意味を概念と見なす (Langacker 1991: 2) 認知言語学の観点から、以下、いくつかの事例を考えて行きたい。

3.1. 事例1—wing

我々は体の表面を衣服で覆うことで寒暖の調節をし、雨が降れば雨宿りをし、大切なものは金庫に収納して保管するなど、一般的に、「内」に対しては「安全」や「保護」、また「外」に対しては「危険」や「危機」というイメージを抱く。先に見た秘密に関するイディオムの例を見ても、それは明白であろう。以上のことから、一般的にはあまり言われていないが、推論や言語表現に頻繁に観察されるという理由で SAFE IS WITHIN, DANGER IS WITHOUT という概念メタファを認めても良いように思われる。

- | | |
|---|--|
| (9) וְאִשָּׁא אֲחֹתְכֶם עַל-כַּנְפֵי נְשָׂרִים | אַתֶּם רְאִיתֶם אֲשֶׁר עָשִׂיתִי לְמִצְרַיִם |
| B | A |
| (and-[how]-I-carried you under-wings-of eagles) | (you saw what I-did to-[the]-Egyptians) |
| | (Ex. 19:4) |
| (9') Ye haue seene what I did vnto the Egyptians, and how I bare you on Eagles wings, | |
| | (AV, Ex. 19:4) |

例 (9) の文 B は単に אֲחֹתְכֶם (you = 妻) がどこに位置しているのかを陳述している文ではない。妻を עַל-כַּנְפֵי נְשָׂרִים 「鷲の翼の下」に入れるという表現は、SAFE IS WITHIN という概念メタファを介することによって、「鷲の翼」を「盾」と解釈することが可能になる。「鷲の翼の下」に隠すということは、概念メタファ SAFE IS WITHIN を参照することにより、隠されたものを保護するという解釈が導き出されているのである。「鷲の翼」は他の表現でも同様の意味で用いられるほど生産性が高い概念であるとは言えないが、「内」と「安全」の関係を我々が有意味に結び付けているがゆえにこのような解釈が働いていると考えられる。つまり、概念メタファが時代・文化・宗教的価値観の相違を超えて維持されているがゆえに、安定的な解釈を保証しているのである。例 (10) と (11) のように בְּצֶל כַּנְפֵיךָ 「翼の影」も「保護」の意味で用いられることがあるのも同様の理由である。

(AV, Deut, 25: 9)

例 (13) で「靴を脱がせる」ということは、メタファによる思考を介して「責任・権利の履行」を象徴する「靴」を取り上げることであり、そこに「権利を剥奪する」という読みを与えている。

(14) $\text{עַל־אֶדוֹם אֲשָׁלֵךְ נַעְלַי}$ (Ps. 60: 10)

(over Edom I will cast shoe of me)

(14[~]) over Edom wil I cast out my shooe: (AV, Ps. 60: 8)

(14[~]) I will throw my sandals on Edom, as a sign that I own it (GNB, Ps. 60: 8)

例 (14) では靴が「権利」の1つである「所有権」を示している。「ある土地に靴を投げる」ということは、戦ってその土地を手に入れることを意図しているのであり、これは新しい領地に「足を踏み入れる」という経験が基盤となっていると思われる。このことから「靴を投げ」、靴が落ちた場所が「自分のものになる」という解釈が生まれる。(14[~]) の現代英語訳聖書では、この「所有」という古代ヘブライ語表現の理解を助けるために、解説のための句(as a sign that I own it)が付加されている。

このように「靴」が「法的認証」として捉えられているという事実を背景知識として蓄えていないならば、(12) (13) (14) の引用は全く理解できないであろう。現代に生きる我々の背景知識とは質的に異なるのである(旧約聖書を読み解くために越えなければならない大きな壁の1つは、この背景知識問題である。このことについては橋本・八木橋(2007)でドメインマトリックスの観点から詳しく論じた)。この「靴を脱ぐ」「靴を脱がせる」「靴を投げる」という表現がすべて「法的権利の移譲」という解釈を導き出すのはなぜだろうか。「法的認証」の象徴である「靴」は、それ自体では「移譲」までは含意していないはずである。しかしこれらは、ある人物がある靴を履き続けている状態から、それを手放すことで靴の納まるべき位置が移動したという変化が示されていることは、これらの例を見れば容易に理解されるであろう。つまり、CHANGE OF STATE IS CHANGE OF LOCATION という包括的レベルの概念メタファおよび一般的な変化に関する命題的構造のメタファが、場所の変化が状態の変化を生み出しうるという認知を導いているのである。ここでも、表面的には表れていないものの、このメタファ表現の背後で概念メタファが解釈の安定を支えていることが確認できるであろう。

4. 結語

数千年の時を隔て現代の読者の目に入る旧約聖書のメタファの中には、その時代の文化に根ざした生産性の低い単発的メタファ表現が数多く認められる。それらの一部を分析した結果、その背景には概念メタファがあり、概念メタファは時代・文化・宗教的価値観の相違を超えて共通したイメージで捉えられているために、現代に生きる我々も時代を超えてそれらを理解することが可能であることが明らかになった。一方において、それを表現する方法は時代・文化・宗教的価値観に基づくものであり、概念メタファと表現方法との関係を体系化する

必要があることは言うまでもない。

[参考文献]

- Chafe, W. L. 1968. "Idiomatcity as an anomaly in the Chomskyan paradigm". In *Foundations of Language*, 4. Pp.109-125.
- Chomsky, N. 1980. *Rules and Representations*. Columbia University Press.
- Croft, W. and Cruse, D. A. 2004. *Cognitive Linguistics*. Cambridge University Press.
- Eagleton, T. 2000. *The Idea of Culture*. Blackwell.
- Fraser, B. 1970. "Idioms within a transformational grammar". In *Foundations of Language*, 6. Pp. 22-42.
- Gibbs, R. 1994. *The Poetics of Mind: Figurative thought, Language, and Understanding*. Cambridge University Press.
- Gibbs, R. and Nayak, N. 1989. "Psycholinguistic studies on the syntactic behavior of idioms". In *Cognitive Psychology*, 21. Pp. 100-138.
- Gibbs, R. and O' Brien, J. 1990. "Idioms and mental imagery: The metaphorical motivation for idiomatic meaning". In *Cognition*, 36. Pp. 35-68.
- 池上嘉彦. 1975. 『意味論』. 大修館書店.
- . 2002. 『自然と文化の記号論』. 放送大学教育振興会.
- 橋本功. (1998) 『聖書の英語とヘブライ語法』. 英潮社.
- . (2005) 『英語史入門』. 慶應義塾大学出版会.
- 橋本功・八木橋宏勇. (2006) 「聖書のメタファー分析」. 『人文科学論集』 <文化コミュニケーション学科編>第40号. 信州大学. Pp.27-44.
- . (2007) 「メタファとメトニミの相互作用—聖書を読み解く認知メカニズム」. 『人文科学論集』 <文化コミュニケーション学科編>第41号. 信州大学. Pp.1-18.
- Katz, J. J. and Postal, P. M. 1964. *An Integrated Theory of Linguistic Descriptions*. MIT Press.
- Kövecses, Z. 2002. *Metaphor: A Practical Introduction*. Oxford University Press.
- Lakoff, G. 2006 [1993]. "The contemporary theory of metaphor". In D. Geeraerts (ed) *Cognitive Linguistics: Basic Readings*. Mouton de Gruyter. Pp.185-238.
- Lakoff, G. and Johnson, M. 1980 [2003]. *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and Turner, M. 1989. *More than Cool Reason*. The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Concept, Image, and Symbol: the Cognitive Basis of Grammar*. Mouton de Gruyter.
- Makkai, A. 1972. *Idiom Structure In English*. Mouton de Gruyter.
- マケーレブ・ジャン&安田一郎. 1983. 『アメリカ口語辞典』. 朝日出版社.
- Newmeyer, J. F. 1972. "The insertion of idioms". In *Papers From The Eighth Regional Meeting Chicago Linguistic Society*. Chicago Linguistic Society. Pp. 294-302.

- Nunberg, D. G. 1978. *The Pragmatics of reference*. Indiana University Linguistics Club.
- 瀬戸賢一 (1997) 「メトニミーとは何か」 & 「メトニミーの日英比較」 卷下吉夫・瀬戸賢一
『文化と発想とレトリック』. 研究社. Pp. 105-165.
- 高尾享幸. 2003. 「メタファー表現の意味と概念化」. 松本曜 (編) 『認知意味論』. 大修館書店. Pp. 187-249.
- Taylor, J. R. 2002. *Cognitive Grammar*. Oxford University Press.
- Tregelles, S.P. (Trans). 1980¹⁴. *Gesenius' Hebrew and Chaldee Lexicon to the Old Testament Scriptures*. WM. B. Eerdmans Publishing Company.
- 吉村公宏. 2002. 「経験基盤主義」. 辻幸夫 (編) 『認知言語学キーワード事典』. 研究社. Pp. 61-62.

[引用聖書]

II. 引用した聖書

A. ヘブライ語聖書

HB = *Biblia Hebraica*. (ed.) R. Kittel. Deutsche Bibelstiftung. 1977.

B. 英訳聖書

AV = Authorized Version = *The Holy Bible, Contayning the Old Testament, and the New: Newly Translated out of the Originall tongues: & with the former translations diligently compared and reuised by his Maiesties speciall mandment. Appointed to be read in Churches*. (1611) Robert Barker. (Repr.) With an introduction by A. W. Pollard and illustrative documents. Oxford University Press. 1911.

NKJ = *Holy Bible: The New King James Version: Containing the Old and New Testaments*. Thomas Nelson. 1982.

GNB = *Good News Bible: The Bible in Today's English Version*. (ed.) R.G. Bratcher. American Bible Society. 1976.

C. 日本語訳聖書

新共同訳 = 『聖書 新共同訳』 日本聖書教会. 1989.

(2007年11月20日受理)